

琵琶湖観光の幕開け

平成一一年七月三十一日(土)～九月五日(日)



島めぐりポスター

この展覧会では、近代以降の琵琶湖に焦点をあて、人々と湖の関わりを考えてみます。構成は、大きく蒸気船が活躍した時代と、その後の観光船の時代の二つに分けて展示します。

まず、蒸気船の時代では、明治二年(一八六九)に浮かんだ外輪汽船一番丸から、明治二十二年の鉄道連絡船までを紹介します。

木造和船が帆に風をはらんでのんびりと渡っていた湖上、そこに漆黒の煙を吐いて邁進する蒸気船一番丸が登場します。まだ幕末の余韻で世の中が落ち着かなかつた明治初頭、蒸気船の登場は、湖国の人々にとって新しい時代の到来を痛感させる出来事でした。その後たくさんの蒸気船が湖上に就航し、東西交通の重要航路琵琶湖は、大変な賑わいを見せます。そのピークが明治十五年の鉄道連絡船でした。これは大津―長浜間を船で結び、鉄道未開通の区間を補う我が国初の連絡船でしたが、明治二十二年東海道線全通により、その使命を終え蒸気船の時代は幕を下ろします。

代わって登場するのが、観光船です。大正時代からはじまるツーリズムの流れは、琵琶湖にも押し寄せ、次々と大型観光船が登場します。折から、京津電車が開通し、京阪神の人々にとってより身近なリゾート地として、琵琶湖が脚光をあびることになります。湖とそれを取り巻く山々が、四季折々の風情を見せる湖国の風光は、観光地としても魅力を持ちます。夏は水泳、冬はスキーといった様々なレジャーにも対応できる点で、琵琶湖は優れた観光地だったといえます。華やかな琵琶湖観光、それを取り巻く観光地の変遷をここでは紹介します。

特別陳列

琵琶湖観光の幕開け

展覧会の構成

・プロローグ 木造和船—丸子船の時代—

I 蒸気船の時代

(1) 一番丸誕生

(2) 蒸気船隆盛・鉄道連絡船

II 観光船の時代

(1) 私鉄網の整備と大型観光船の登場

(2) 琵琶湖へ—琵琶湖観光花ざかり—

(3) 戦時下の琵琶湖とはり丸就航

(4) 湖国の足 汽船

(5) 湖畔の宿

主な展示品

外輪汽船一番丸錦絵

鹿田啓介氏所蔵

明治二年三月三日、湖上に浮かんだ外輪汽船一番丸の錦絵です。この船を建造したのは加賀大聖寺藩士石川嶂と大津百艘船仲間の一庭啓二でした。北陸から京都への往来が激しくなった幕末、石川は、琵琶湖に蒸気船を浮かべ、輸送による混乱を打開しようと藩に働きかけます。しかし賛同を得ることができず、大津に同志を求め、一庭と出会います。二人は、長崎におもむき、汽船の操作を習得すると共に、機関を購入し大津に戻ります。彼等の活動は、藩を動かし大聖寺藩大津汽船局が設けられ、一番丸を建造、ついに湖上に浮かべたのでした。

この錦絵の上に書かれた漢詩は、右が大聖寺藩の儒者東方真平（芝山とも）、中央が、加賀藩の蘭学者鹿田



外輪汽船一番丸錦絵（写真は神戸商船大学附属海事資料館所蔵のもの）

文平です。東方は、石川の師にあたり、湖上汽船建造の発案者ともいわれる人物。この讚から、大聖寺藩やその宗藩である加賀藩によって一番丸建造が行われたことがうかがえます。実際は、石川と一庭の若い情熱、そして大津町人の助力が背景にあって、この大事業は成し遂げられたといえるでしょう。ちなみに、石川はこの時三十歳、一庭は二十歳でした。

汽船乗船札

中村よし氏所蔵

明治五年長浜で進水した湖龍丸の乗船札です。当時は、和紙製のほか木製の乗船札なども見られ、乗船艦札といっていました。

汽船は上等・中等・下等の区分があり、定員に応じた番号が付けられています。

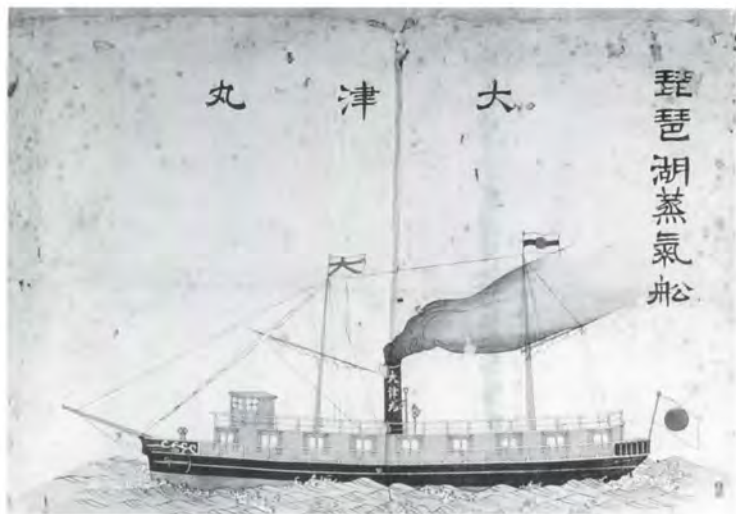


乗船札

汽船大津丸錦絵

草野晴子氏所蔵

一番丸就航は、湖国の人々に蒸気船の重要性を痛感させたようです。このあと、またたく間にたくさん蒸気船が建造されました。明治七年には十五艘、明治十五年には三十六艘もの蒸気船が就航していました。この大津丸は、明治八年、大津町人によって建造された蒸気船で、長さ五八・二尺、二十二トンの船です。船先に、兎を取り付けられているのが特徴的です。もしかすると、三尾神社の神使である兎を意図していたのかもしれません。



汽船大津丸錦絵

島めぐりポスター

琵琶湖汽船所蔵

大正十一年進水した太湖汽船のみどり丸は、琵琶湖に浮かんだ大型観光船のはじまりといえます。昭和三年には、太湖汽船観光船京阪丸を進水させ、同じ島めぐり航路でしぎを削りました。時あたかもツーリズム最盛期、多くの観光客は、この両船で琵琶湖の風光を楽しみました。(表紙写真)

琵琶湖の
釣り船
もろこ

モロコ釣りサービス

2月28日～4月8日までの
毎日曜・祭日・水曜・1日・15日の前後
野洲・長命寺・津川

洗大津発12時・本舞臺日午7時45分

京都三條より船往津野洲(1円30銭)長命寺(1円55銭)

太湖汽船 京阪電車

モロコ釣りポスター

モロコ釣り・スキー船ポスター
琵琶湖は、風光だけでなく、京阪神の身近なリゾートとしても脚光をあびます。夏は水泳、冬はスキーとそれぞれに合った場所が開発され、移動は、船が利用されました。電車を下りて船に乗れば目的地へ到着するこれらの船は、多くの利用客を迎えます。

目ざめて楽しい湖世界!

スキー船の夢

マキノナガラ

国有鉄道 太湖汽船

公社債式ハ日興證券

スキー船ポスター

◆近江八景—名所風俗の魅力—◆

七月三日(火)〜九月二日(日)

現在の近江八景の情景は、関白、近衛信尹(近衛)(一五六五〜一六一四)が和歌に詠んで選定したものとされます。その後もしばらくは、流動的な形で八景が和歌や絵画に取りあげられていました。しかし、江戸時代中期以降、庶民のあいだで旅行が盛んに行われるようになり、名所案内誌等で、信尹の近江八景が紹介され定着していきました。

ひと口に近江八景といっても、その描かれ方は、幾つかのジャンルに分けられます。まず、江戸時代の初期から中期にかけて、町絵師の工房で制作された、屏風を中心とした近江名所図があります。これは、八景を主題としつつも、社寺や祭礼に群集する人々や、街道や港の賑わいなどの風俗面をかなり盛り込んだ、名所風俗図といえるものです。一方で、同時代には、和歌の名だたる所として、対照的な描かれ方をした八景図があります。これらは、御用絵師狩野派・土佐派の伝統的な様式によって、上品な和歌の世界を表現した名所絵として描かれています。主にそうした描き手によって制作された時代が過ぎ、江戸中後期になると、浮世絵師が風景版画を手がけるようになります。そして、風景版画を大成させた歌川広重によって、近江八景も、情景の美しさそのものが追求された風景画として完成をみるようになります。

今回は、そのうち、名所風俗画としての近江八景の作品に的をしぼり、人々の賑わいや活気に彩られた江戸時代の行楽地近江八景と交通の要衝大津の様を楽しんでいただきたいと思います。

7〜10月の
ミニ企画展

◆幻の曳山◆

—大津祭神楽山の幕飾り—

九月一日(火)〜一日(日)

秋の大津を彩る大津祭は、現在も一〇月九日・一〇日の両日、一三基の曳山が大津の町を巡行しています。大津祭の成立は古く、いまから四〇〇年ほど前の慶長年間(一五九六〜一六一五)に、田鍛冶屋町の塩売治兵衛が、狸の面をかぶって踊ったことが始まりとされています。治兵衛の死後、各町では次々に曳山が制作され、安永五年(一七七六)には、一四基の曳山が出揃いました。今回のミニ企画展は、大津祭の曳山で唯一、現在巡行の列に加わっていない神楽山を紹介します。



神楽山見送幕 堅田町自治会蔵

神楽山は、旧堅田町（中央三・四丁目）の人々によって巡行していた曳山です。神楽山の成立年代は、大津祭の曳山の中でも早い時期にあたり、寛永一四年（一六三七）成立です。当初は三輪明神を祀ることから三輪山と称していましたが、享保九年（一七三二）に神楽山に名前を変えました。その後も、曳山は毎年出されていましたが、幕末頃から徐々に休みがちとなり、明治五年には、曳山町を退くことになりました。現在では、曳山の本体は現存しておらず、巡行には参加していませんが、曳山の上に飾られていたからくり人形のみが祭で展示されていました。ところが、近年になって、人形に加えて神楽山の四方を彩る幕が四点が新たに発見されました。前懸は、司馬温公の故事「瓶割図」、左右の胴懸は「養蚕図」で、織の行程を刺繍したものです。また、後を飾る見送り幕には、龍の幕が懸けられていました。これは、中国の清朝の初期に制定された、緞錦の官服（明・清の時代を通して使用された、皇帝や官吏の衣服）を幕に仕立てたもので、大津祭の他の曳山や祇園祭の山鉾でも数多く使用されているものです。ただし、今回の神楽山見送り幕は、官服として仕立てられたものを再利用したのではなく、仕立て前の反物を利用して制作されたもので、他にあまり類例をみない、貴重なものとわかりました。

本展では、これらの幕類に加え、神楽山ゆかりの史料などによって、幻の曳山を紹介します。

ミニ企画展は常設展示室内で行っております。期間中は関連講座も予定しております。詳しくはれきはくインフォメーションをご覧ください。

「青い目の人形」

歓迎風景の写真（長等小学校所蔵）

昭和二年日米子どもたちの平和交流の様子を撮影し、昭和二年三月、アメリカの子どもたちから、日本の子どもたちに向け、友情のしるしとして青い目の人形が贈られてきた。全国に配られた約一万二千体のうち、滋賀県には、昭和二年三月五日に一〇六体（のちにも配布があり総計では一三五体）が到着、同月九日歓迎会が県公会堂（現長等小学校の敷地にかつてあった）で行われ、その後幼稚園、小学校に配られた。

この人形たちは、各学校の子どもたちに盛大に迎えられ、各学校で歓迎会が行われ、同年十月には、このお礼として日本人形がアメリカに贈られている。日米子どもたちによって交わされた友情の証である「青い目の人形」も、第二次世界大戦の渦中で失われ、ほとんど残されていない。現在県内には、市内平野小学校と甲南町立第二小学校に残されているのみである。

長等小学校（当時大津西小学校）に、この「青い目の人形」を歓迎する子どもたちの様子を捉えた写真が大切に残されていた。歓迎会の様子や「青い目の人形」と子どもたちの交流風景、関連イベントの写真など五枚で、当時の様子がリアルに伝わってくる貴重な写真である。

この写真は、「青い目の人形」が、学校に到着した時の歓迎風景の様子を捉えた一枚。子どもたちが取り囲む中央に、人形を抱いた女の子が立っている。当時大津西小学校は、現在の京阪電鉄三井寺駅南西に位置し、その建物の大きな特徴は、大津代官所の門を移築した

といわれる校門であった。この写真には、背後にこの長屋門がはっきり写っており、その点でも貴重な一枚となっている。

長等小学校に残された写真は、失われた人形たちが、当時子どもたちにとのよう受け止められたかを知る上で貴重な写真である。この一部は、歴史博物館常設展示の中で、平野小学校の「青い目の人形」の隣に現在展示している。



れきはくインフォメーション

9月	8月	7月
<p>25 土</p> <p>三企園展関連講座</p> <p>龍の模様—大津祭の曳山懸装品から—</p> <p>○大津祭の懸装品に数多く現存する龍の図柄について解説します。</p> <p>13時30分～15時 講師 和田 光生(本館学芸員)</p>	<p>28 土</p> <p>特別陳列関連講座</p> <p>明治初期の蒸気船</p> <p>○蒸気船「一番丸」を中心に、琵琶湖の蒸気船の成立を紹介します。</p> <p>10時～11時30分 講師 和田 光生(本館学芸員)</p>	<p>24 土</p> <p>三企園展関連講座</p> <p>湖をめぐる風景画の歴史</p> <p>○琵琶湖の風景画の展開をたどるとともに、近江八景の成立について考えます。</p> <p>13時30分～15時 講師 岩田由美子(滋賀県立近代美術館学芸員)</p>
<p>18 土</p> <p>第186土曜講座</p> <p>園城寺金堂の工匠たち</p> <p>○慶長三年の復興以後、園城寺の諸堂舎を建立した工匠たちの活動を紹介します。</p> <p>13時30分～15時 講師 福家 俊彦(園城寺執事)</p>	<p>21 土</p> <p>特別陳列関連講座</p> <p>湖からみた大津</p> <p>○展覧会の見学と船に乗って近江八景や大津の風景を見学します。</p> <p>一回目9時30分～12時 二回目13時30分～16時30分</p>	<p>1 日</p> <p>特別陳列関連講座</p> <p>歴史博物館・琵琶湖博物館展覧会見学会</p> <p>○船のついで、琵琶湖に関わる2つの展覧会を見学します。</p> <p>13時30分～16時30分</p>
<p>11 土</p> <p>第67回親子座講座</p> <p>遺跡の発掘調査を体験しよう</p> <p>○調査中の現場で、発掘作業を体験し、土器などを見つけてみよう。</p> <p>10時～11時30分 講師 市文化財保護課技師</p>	<p>4 土</p> <p>特別陳列関連講座</p> <p>琵琶湖観光のあゆみ</p> <p>○大正期以降の琵琶湖観光のあゆみを概観します。</p> <p>13時30分～15時 講師 木津 勝(本館学芸員)</p>	

※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。
※いずれの講座もはがきで、お申し込みください。

「図説大津の歴史」だより

今回は「図説大津の歴史」の掲載資料から、供御の瀬という地名の見える瀬田川の絵図を紹介します。

写真の絵図は、黒津二丁目の正法寺に伝来したもので、「近江国栗太郡黒津村絵図」との表題があり、縦一五〇〇×横二一〇〇。裏書に、伝来の古図が虫損したので、宝暦元年(一七五一)八月に模写したものと記載があります。黒津村の集落や寺院、田畑の小字名などを細かく図示したのですが、そのなかに瀬田川も描かれ、大日山の南麓辺から対岸にかけての川中に「供御ノ瀬川中百四拾式間」の記載があります。

供御とは、天皇(朝廷)や神社にさしあげる食物のこと。平安時代、黒津には、朝廷に魚を納めるために設けられた「田上綱代」がありました。供御の瀬は、それに由来する地名と考えられます。

また、供御の瀬は、瀬田川を唯一徒歩で渡れる浅瀬で、軍事上の要地でもありました。源平の争乱や承久の乱など、古代・中世の政治を左右した重要な戦いでも、供御の瀬が戦略上の拠点となったことは、よく知



られています。江戸時代にも、ここは重要な軍事拠点とされ、幕府と膳所藩が実地検分をしばしば実施し、黒津村は対岸の南郷村とともに、供御の瀬の浅瀬を確認する「瀬踏役」をつとめていました。写真の黒津村絵図に「供御の瀬」が明記されているのは、同村がなっていたこの役割によるものでしょう。

なお、「図説大津の歴史」は本年十月一日発行予定で準備を進めています。ご期待下さい。